

定価 29,400円 (本体 28,000円 + 税)

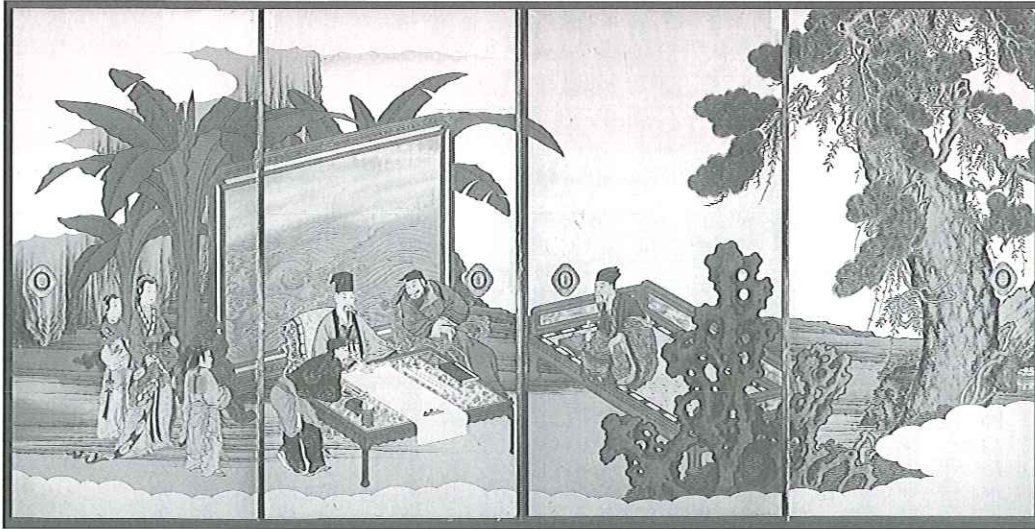
B5判・本文 410頁・カラー口絵 8頁

ISBN978-4-8055-0639-4 C3071

## 京狩野の研究

脇坂 淳 著

(京都教育大学名誉教授)



「西園雅集図」 狩野永岳 隣華院

## 本書の概要

狩野派は室町時代から江戸時代末までの間、四百年余に亘って流派体制を維持してきた。日本絵画史の中世から近世へかけて大きな流れを作った大黒柱である。それが故に注目度も高く、作品や制作者、あるいは支持層、周りへの影響などの研究が進み、絵画史上に占める位置が随分明らかになっている。そうしたなか、流れの一つの京狩野も相当知られるに至ったが、不明のところも多々残されている。本書は、京狩野様式、支持層や経済的基盤、家系の継承問題、制作過程や制作時間、画料などを明らかにし、京狩野を体系的に捉えようとした研究である。

まず第一章において、山楽および山雪によって形成された垂直水平形構図という京狩野様式の基本的造形を定義づける。それは後章で登場の歴代に踏襲される形を検証する際の基本様式でもある。また、山楽の造形癖から永徳筆とされてきた「檜図屏風」(東京国立博物館蔵)について、山楽筆の可能性を提示する。第二・第三章では、「永」字を冠した三代目永納以降、永敬、永伯、永良、永常、永俊らが画系と家系の継承を如何に果たしていくか、苦難の道程を九条家及びそこから派生する支持者たちを視野に入れながら考察する。同時に歴代の作風を京狩野様式の基本的造形と比較しつつ検証を加える。

第四章では、京狩野の名を不朽ならしめた九代目永岳の出現とその画業に光を当て、六十五歳から一挙に二歳を加算した六十七歳表記の意味を考える。第五章では、禁裏の障壁画制作について考察。江戸期の禁裏造営は八度に及び、障壁画制作は江戸狩野から次第に京都在住の絵師へと移行する。最後の安政度は、土佐、鶴沢、京狩野を中心に京都画壇の面々によって制作がなされた。そこには京都画壇における一種のヒエラルキーも認められる。とりわけ、永岳の画事に焦点を当て、より具体的な制作過程と制作時間を明らかにする。あわせて不明であった画料についても「御絵本途」と比較しながら試算を試みた。第六章では、京狩野家資料(絵画資料と文書史料)について考察する。同資料は山楽・山雪画の粉本と幕末から明治初年にかけての史料ながら、山楽・山雪の作品を考える際、また、家系の継承や御月扇制作の実情等を知る上でも欠かせず、本論形成に必要な文献である。

「画業の継承は家系の継承でもあり、いかに家系を保つかはいつの時代も肝要とされる。山楽以来、画業を生業としてきた京狩野にとって、家系の継承は常に悩みの種だった。早くも二代に養子を立てざるを得なく、山雪を迎えた。その後、幸いにして五代までは実子で継ぐことができた。しかし、六代から十一代の間はすべて養子をもって家を維持してきたのである。また、家系にならんで画系の継承も重要な問題である。画系の継承は様式の継承であり、流派の継承そのものであるが、時世は時に表現の変容を求める。江戸の探幽は見事にそれを果たし、狩野のスタイルを一変させた。ところが、『本朝画史』からも窺えるように、京狩野は山楽・山雪のスタイルを可能な限り継承、むしろ狩野本流の伝統にあることを自負さえしながら流派形成に努めてきた。そうした各世代の画様と営為を体系的に捉え、個々の作品論に止まらない近世絵画史上の京狩野の位置を明晰にした論考である。



室町時代末から幕末まで、常に画壇に君臨し続けた我が国最大の流派、狩野派は、豊臣氏滅亡後、徳川幕府を頼って江戸に下った一派を江戸狩野と称し、京都に留まり、公家や寺院の御用絵師として京都を中心に活躍した一派を京狩野と呼んでいる。幕府の手厚い庇護を受けた御用絵師、江戸狩野に比べ、その扱いに大きな格差のあった京狩野の研究は個々の範囲に留まることが多く、体系的な研究が待たれていた。近世京都画壇 250年の流れの中で京狩野の画態と営為を明確にし、異なる京狩野の体系的研究の公刊。

目次

はじめに

第一章 画風の形成

第一節 京狩野の始まり

第二節 山楽の造形癖

第三節 「檜図」 屏風の筆者

第四節 垂直水平形構図

第五節 山雪、偏に心を後素に

第六節 長恨歌図巻

第二章 永字を冠しての継承

第一節 永納、文藻にも長ける

第二節 本朝画史の編述

第三節 永納の障壁画

第四節 永敬の和画と漢画

第五節 永敬の弟永梢のこと

第六節 東本願寺関係の障壁画制作

第三章 凌ぎと繋ぎの時代

第一節 宝永度造営の障壁画制作

第二節 春卜の『画巧潜覧』と永伯

第三節 永伯の遺作

第四節 永良、永常そして永俊

第五節 景山家の守岳

第六節 永俊と守岳変じた永岳

第四章 掉尾を飾った永岳

第一節 隣華院の開創と客殿再建

第二節 晴れの大作 一―三面

第三節 西園雅集図

第四節 制作時間について

第五節 東海庵屏風絵の制作期と画料

第六節 屏風の空間演出

第七節 年齢加算問題、還暦後は年なし

第八節 永岳画の年紀と年齢

第九節 永岳の年齢加算を考える

第十節 やまと絵の歌意図

第五章 禁裏の障壁画制作

第一節 安政度造営の禁裏

第二節 障壁画筆者の変遷

第三節 安政度の障壁画制作

第四節 御常御殿上段の間と一の間

第五節 御学問所上段の間

第六節 皇后宮常御殿御小座敷上の間、小御所上段の間、諸大夫の間「鶴の間」

第七節 限られた制作時間

第八節 画料について

第九節 世評と主な障壁画筆者

第六章 京狩野家資料について

第一節 京狩野家資料について

第二節 絵画資料と文書類の概要

第三節 永祥の相続問題と遺作

第四節 御月扇制作にみる京狩野家

京狩野家系図

史料一 狩野永納家伝画軸序

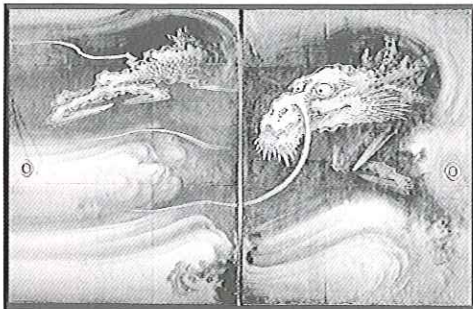
史料二 鈴鹿家京狩野文書

京狩野家資料

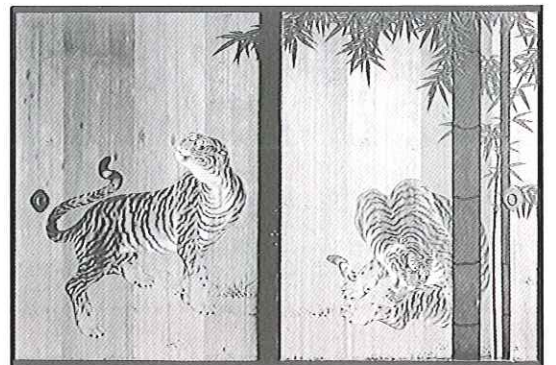
図版一覧

あとがき

索引



「龍図」 狩野永岳 隣華院



「虎図」 狩野永岳 隣華院

[ 著者略歴 ]

わきさか あつし けんじゅん  
脇坂 淳 (玄淳)

昭和 42 年～ 47 年 鎌倉市立鎌倉国宝館 学芸員  
昭和 48 年～平成元年 大阪市立美術館 学芸員・主任学芸員  
平成元年～平成 5 年 神戸常磐短期大学 教授  
平成 5 年～平成 17 年 京都教育大学 教授  
平成 17 年～ 京都教育大学 名誉教授

主な研究内容：日本近世絵画の研究

特に、長谷川等伯および長谷川派、大坂画壇、京狩野および狩野永岳